

ケアの地理学に関する覚書

— 『Introducing Human Geographies』（第4版）を参照して—

Notes on the geographies of care:

With reference to Introducing Human Geographies (4th Edition)

久木元 美 琴

Mikoto KUKIMOTO

本稿では、ケアの地理学に関する研究動向を踏まえたうえで、英語圏の人文地理学における「ケア」概念について、人文地理学の入門書の最新の改訂版を参照しながら整理し、日本への応用可能性と論点を提示した。対象とした入門書によれば、「グローバルなケアエコノミー」と「ケアと責任」という二つの軸があるほか、他項目でもインフォーマルなケア労働やアンペイド・ワークが扱われている。

キーワード：ケアの地理学，人文地理学，ケア労働，モビリティ

Key words：geographies of care, Human Geography, Care work, Mobility

I 関心の所在と目的

近年、「ケア」が社会的にも学問的にも注目されている。この理由の一つには、脱工業化以降の産業構造の変化と経済のグローバル化と新自由主義の浸透によって、従来、「シャドウ・ワーク」として等閑視されてきたケア労働の問題が、日本をはじめとした先進諸国において顕在化したことが挙げられる。二つ目の理由は、地球的課題の複雑化にともなう「ケア」概念の拡張である。気候変動をはじめとした環境問題の深刻化と、主にグローバル・サウスに偏在するリスクとプレカリティ、ポストコロニアルな状況下で表出する移民・難民と地域間格差の再生産が広く認識される中で、こうした構造的問題とケア労働や社会的再生産といった身近な日常とが接続する形で捉えられるようになってきた。

筆者はこれまで、子育てを支えるケアの地域差や空間性について研究してきた。久木元(2016)では、地域の家族構造、産業構造、都市空間構造に規定される女性就業（女性の働き方）の地域差が、保育や子育て支援サービス需給と結びついていることを示した。女性の働き方の地域差が子育てに係るサービス需給と結びつく理由は、子育てを含むケア労働を中心的に担ってきたのが女性であることが多かったためである。そうした女性のケア労働の担い手としての特徴は、時代差と地域差を持ち、産業構造の変化と世界的なジェンダー平等化の推進によって、性別としての男女間のケア責任の配置は流動化・複雑化している。

英語圏の地理学では、白人中心主義や男性中心主義への反省から、ラディカル地理学、批判地理学、フェミニスト地理学による議論がさかんに行われてきた。「ケア care」をキーワードとする研究潮流は、その延長上に生じてきたものとみなすことができる。この潮流は遅くとも 2000 年代にはみられており、人文地理学者の立ち位置と視座を問い直す運動的な側面と研究対象や方法の刷新をも含む一領域を形成している。本稿では、こうした研究潮流をひとまず「ケアの地理学」と呼ぶ。

昨今の「ケア」への高い注目と、ケア労働や社会的再生産をめぐる現代的課題に鑑みれば、英語圏地理学における上述のような研究潮流を踏まえ、国内地理学への応用可能性を検討することには一定の意義があると考えられる。一方、国内地理学において、明示的に広義の「ケア」の概念を用いた研究の蓄積は端緒についたばかりである。英語圏地理学における「ケア」の概念は従前の議論動向を踏まえながら隣接学問の多種多様な思想を摂取する形で発展してきており、近年の論文もこうした文脈の共有が前提となっている。国内地理学での応用可能性を検討するにあたっては、英語圏地理学で「ケア」というタームがどのように取り扱われ、いかなるテーマと結びついているかといった整理が必要であるように思われる。

本稿では、その作業の一部として、ケアの地理学に関する研究動向を整理する。まず、日本の地理学における「ケア」の取り扱いをみたうえで、英語圏地理学における「ケアの地理学」について紹介する（Ⅱ）。続くⅢでは、ケアの地理学の理論的背景やテーマ間の関係性が英語圏地理学の入門書でどのように整理されているかを確認するために『Introducing Human Geographies』第4版（2024年刊行）を参照し、「ケア」および関連する内容の取り扱いを整理する。最後に、Ⅳでは、近年の動向として、ケア・インフラストラクチャーの研究について概観し、日本の文脈に引き寄せてケアと日常的な移動に関する論点を提示する。

なお、「ケアの地理学」に関連する研究レビューとしては、畔蒜（2019, 2021）が主にケア労働力やケアサービス研究の範囲に焦点化して整理したものがある。ここでは、「ケア」をめぐる地理学の潮流を踏まえるために、ケアと責任、再生産労働、日常生活やインフラといった範疇も含めて概観する。また、地域の諸環境から「ケア」にアプローチするものとしては、特に医療地理学、健康地理学、老年学の分野で、健康や癒しと地理的環境との関係を検討する研究の蓄積が厚い。これらの全体像を提示することは現時点での筆者の力量を超えるため、本稿では、これらをいったん除外して、ケア労働や福祉・ケアサービスの地理学の延長上に位置するものを対象とする。

Ⅱ 日本および英語圏の地理学における「ケア」

1 日本の地理学界における「ケア」を冠する研究動向

日本の地理学での「ケア」の扱われ方を概観するために、Cinii Research で論文検索を行った。具体的には、2025 年以前の論文のうち「タイトル」に「ケア」を含み、「刊行物名」に「地

理」を含むものを検索した。その結果、55 件が得られたが、この中から、表記・読みによる揺れや重複、書評を取り除くと 40 件になった。これには学会発表の要旨も含まれているが、当該テーマへの関心の動向を把握するうえで有用と考えられるため、排除していない。

全体として、タイトルに「ケア」を冠する論文の数は、国の政策動向に強く影響を受けている。特に、「地域包括ケアシステム」が 2010 年代に本格始動したことで、これを研究対象とする論文や研究発表が増加した。40 件中、タイトルに「地域包括ケア」を含むものは 21 件と過半数に上り、高齢者福祉や医療に関するサービス供給の地理学的研究を進めてきた宮澤仁氏（宮澤 2017 など）、畠山輝雄氏（畠山 2016 など）、杉浦真一郎氏（杉浦 2019 など）、中村努氏（中村 2016 など）らによって手掛けられている。地域包括ケアシステムとは「地域の実情に応じて、高齢者が、可能な限り、住み慣れた地域でその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、医療、介護、介護予防、住まい及び自立した日常生活の支援が包括的に確保される体制」¹⁾であり、介護保険導入後の新たな課題に対応するために政策化された²⁾。地域包括ケアでは地域内の医療、介護、介護予防、住まい及び生活支援の充実と既存の領域をまたぐ多職種連携やネットワーク構築が重視されていることから、多様な主体に着目するローカル・ガバナンスの視点とも親和性が高い。なお、宮澤仁氏は地域包括ケアシステムに関する書籍『都市高齢者の介護・住まい・生活支援—福祉地理学から問い直す地域包括ケアシステム』を刊行しており（宮澤 2021）、都市の高齢者ケアについて地域の多様な主体や拠点から論じている。

英語圏の地理学では「ケア care」をめぐる 1990 年代から様々な議論が蓄積されてきたが、これらの概念や研究枠組みを摂取した研究や紹介もなされている。たとえば、D. コンラッドソンの「ケア空間」の概念を用いた三浦（2016）を含む一連の研究や、畔蒜（2019）による「ケアの地理学」の射程に関する研究レビューのほか、英語圏におけるフェミニスト地理学者の手による書籍『フェミニスト・シティ』から「ケア」と都市空間の論点を整理した久木元（2024）などは、これにあたる。また、後述するように、「ケア」の範囲は広く、フォーマルなサービス以外のコミュニティや人間以外の存在（more-than-human）といった多様な要素を含む。この動向を念頭に置くならば、国家の制度とローカルな相互扶助に着目した稲田（2009）や、家庭内のケア労働に注目してコロナ禍の保育の場所を明らかにした久木元（2022）は、フォーマルなサービス以外の領域を主たる分析対象として取り込んだものとみなすことができる。

2 英語圏のケアの地理学について—グローバル化と日常生活

英語圏地理学で展開されてきた「ケアの地理学 Geographies of care / Caring Geography」の射程は、家事や保育・介護のみならず、モノの生産と流通、人の移動や交通、人間以外の存在（more-than-human）との関係にまで及ぶ。特に「ケアと責任」の議論を踏まえて展開したケアの地理学的視座の根底にあるのは、先進国の都市におけるホワイトカラー層の自立した生活を支えるために、消費者から空間的・社会的に隔絶された空間で行われる周縁化された労働や、

搾取と格差の再生産、世界的な環境汚染や主に途上国へのしわ寄せが生じているという現実への目配りである。

たとえば、先進国の都市住民の生活を支える食品や日用品の生産・流通・消費のグローバルなサプライ・チェーンがある。また、先進国都市のホワイトカラー共働き世帯や働く女性のために発展途上国からの移民労働力が家事や育児、介護、看護などのケア労働を担う「グローバル・ケア・チェーン」もこれに含まれる。こうしたチェーン（連鎖）の末端にいる移民労働者たちは、賃金と引き換えに不安定雇用や人権侵害のリスクにさらされるほか、自国に残した家族とのつながりやケアから切り離されている（Hochschild 2000）。

現代日本の状況にひきつけて考えれば、コンビニやスーパー、ファストフード店やチェーン系レストランの半調理・調理済食品は、家事の中でも炊事を一部代替するが、それを生産する工場労働、長時間営業を支える店舗労働、包装プラスチックを中心とする廃棄物の処理労働を必要とする。買い物の手間を省力化するインターネット通販は、倉庫でのピッキングと配送の労働を背後に抱えている。また、ケア労働の一部は技術革新とともに機械化されてきた。日本でも、近代都市の新中間層における女中が担った下働きは、戦後には白物家電がその一部を代替した。現在でも、洗濯乾燥機、食洗機、ロボット掃除機は「共働き三種の神器」と呼ばれる。これらの家電製品のほか、多くの人々にとって生活必需品となったスマートフォンなどの情報機器と各種アプリケーションは、その生産や原材料の調達を発展途上国での低廉な労働力と電力消費に依存している。

先進国の都市生活は「自立」しているかに見えて、実際には、上記のような地理的に広大で高度に複雑化したシステムとそれを支える「裏方の仕事」に依存している。こうした考え方は、ケア・フェミニズムにおける「ケアの倫理」、特に「依存モデル」の地理的援用として捉えることができる。依存モデルでは、個人を他者との相互依存関係の中に置かれる存在として捉え、ケア労働をはじめとした依存労働の社会的価値を、舞台における「裏方の仕事」という比喻で示す（キティ 2011: 85）。こうした労働は、しばしば低賃金や不安定雇用、搾取に陥りがちだが、地理的に広大で複雑化した構造の中に位置づけられているために、それを利用・消費する人々からは見えにくい。ケアの地理学は、こうした現代社会の構造に対し、空間的・社会的距離に基づく倫理的責任の再考を促す概念として「見えない隣人 *unseen neighbors*」と「遠くの他者 *distant others*」という語を用いてきた（McEwan and Goodman 2010）。

「見えない隣人」とは、物理的には近くに存在するが、社会的・制度的な理由で不可視化されている人々を指し、たとえば、都市部における貧困者や外国人、障害者などが該当する。彼らは日常生活の中で接触する可能性があるにもかかわらず、社会的な無関心や排除によって「見えない」存在となっている。一方、「遠くの他者」は、地理的に離れた場所に住む人々、特にグローバルな経済システムやケア・チェーンの中で関係性を持つ人々を指す。こうした視点は、D.マッシーによるグローバル経済における空間的分業や流動的・関係的空間論にもとづく「つなが

り connectedness」と関係の責任の理念にも影響されている（Massey 2004）³⁾。

従来、こうしたシステムが内包する制度的・構造的な不公正の地理は、ラディカル地理学がその告発を担ってきた。しかし、ケアの地理学の地平を開いた一人である Lawson（2007, 2009）は、個人間の関係性や感情、ケアの実践といった日常的な側面が十分に取り扱われてこなかった点を指摘し、「ケアの地理学（ケアする地理学）Caring geography」⁴⁾として、相互依存性の認識、「ケアの倫理」の導入、研究者の自己反省を提起した。この視点は、英語圏地理学におけるフェミニスト地理学やポストコロニアル地理学とも共鳴し、地理学の方法論と実践に新たな方向性を提示した。

ケア・フェミニズムにおける「ケアの倫理」の影響は、少なくとも以下の二つの点で「ケアの地理学」を特徴づけている。一つには、従来のラディカル地理学における構造主義的なアプローチに対し、それを踏まえながらも、家庭内のケア労働を含む日常的な実践や個人の身体・感情・関係性をより重視する点である。もう一つは、フェミニストの「ケアの倫理」の影響であり、(ネオ)リベラル・フェミニズムとは対照的に、資本主義的な経済活動におけるケア労働や広義の再生産活動における価値の切り下げ（周縁化）とケア責任の階層的・空間的移転といった現象に不公正を読み取る立場をとることである。この特徴によって、「ケアの地理学」は、世帯内の私的労働または専門施設のケアサービスのみならず、社会経済的な地理的現象として、ケア労働または社会的再生産活動を捉えようとする。トロントの「ケアの倫理」および「ケアの5段階」は、ケアの地理学のこうした転回に一つの思想的立脚点を与えた。「ケアの倫理」においてケアは道徳や善意としてではなく政治・社会構造の問題として捉えられ、ケアの不均等な分配の是正と、民主的な連帯や信頼が必要となる。この点において、ケアの地理学における「ケア」は、研究者の倫理や視座であると同時に、研究・教育を含む実践でもある。

Ⅲ 英語圏地理学の入門書における「ケア」

続いて、『Introducing Human Geographies』（第4版）で「ケア」がどのように扱われているかを検討する。

1 対象とする書籍の概要

『Introducing Human Geographies』は、人文地理学の入門書として1999年に初版が出版されて以来、2005年（第2版）、2014年（第3版）と改訂を重ねており、今回参照する第4版（2024年）が最新の改訂版となる。これを取り上げる理由は、25年以上にわたり改訂を重ねながら刊行され続けており人文地理学の入門書として一定の地位を得ていると考えられること、後述のように第4版は従来版から大幅に改定されており、英語圏の人文地理学における最新の関心事や議論動向を反映している可能性が高いと判断されたことである。また、後述のように索引や項目名において「ケア」が多く取り上げられており、本稿の目的に適っている。

第4版の大幅な改定内容として、編者の交代と追加があった。第3版まではポール・クローク、フィリップ・クラング、マーク・グッドウィンの3名が25年近く編者を務めてきたが、今回参照する第4版では、フィリップ・クラングが編者から退き、ポール・クロークとマーク・グッドウィンの2名と、新たにケリー・ドムブロスキー^d、チュンシー・チェン^e、アンドリュー・ウィリアムズ^fの3名が加わり、5名体制となった。こうした編集体制の刷新とともに、内容も大幅に拡充された。巻頭言によれば、その意図と特徴は、人文地理学における現代的な関心事（contemporary concerns）を反映することであり、人文地理学を形作ってきた基礎理論と多様な視点、各下位分野の研究テーマに加えて、テクノロジー、正義、環境といった領域における新たな協働の動きを捉えていることである。本書の内容を概観するために、構成と各章・項目のタイトルを末尾の表1に示した。

PART 1（導入 Introduction）では、「人文地理学とは Understanding human geographies」に続き「人文地理学を実践する Doing human geographies」という章が立てられており、理論の学習を超えた実践が強く意識されていることがうかがえる。続く PART 2（基礎 Foundation）では「人間以上（以外）の存在 More-than-human」や「非（超）表象的なもの More-than-representation」, 「モビリティ（移動性） Mobilities」といった、社会科学全体で現在注目されているキーワードが並ぶ。また、「マジョリティ・ワールドとマイノリティ・ワールド Majority and Minority Worlds」という語句の選択には、「先進国と途上国」といった従来の構図から脱却しようとする立場が見て取れる。さらに「時間 Time」が項目として立てられ、時間地理学について K. エレゴートが執筆を担当しており、過去から現在への変化や日常生活における時空間といった要素が人文地理学の基礎的事項として重視されていることがわかる。

PART 3（テーマ別 Themes）は、「地域地理 Area Geographies」「文化地理 Cultural geographies」「経済地理 Economic geographies」「環境地理 Environmental geographies」「政治地理 Political geographies」「社会地理 Social geographies」の6つのセクションに分かれている。PART 4（協働 Collaborations）では、「人新世 Anthropocene」「テクノロジー technology」「正義 justice」という3つのキーワードがセクション名に掲げられ、それぞれのキーワードにおいて、地理学的にどのような研究が可能かといった論点が提示される。

2 項目名および索引における「ケア」

「ケア care」がタイトルに示される項目は2つあり、PART 3の「経済地理」内の項目「グローバルなケアエコノミー Global economies of care」と、同じく PART 3の「社会地理」内の項目「ケアと責任 Care and responsibility」である。また、項目名には示されていないが、「ケア労働 care work」および「家庭内のケア domestic care」は、PART 3の「移民とディアスポラ Migration and diaspora」, PART 4の「ポスト資本主義の地理 Postcapitalist geographies」, 「日常生活の身近な技術 Ordinary technologies of everyday life」に登場する。ケア労働に関連

する「アンペイド・ワーク unpaid work」は、「仕事 Work」および「ポスト資本主義の地理」の中に登場する。

次に本書における「ケア」とその周辺概念の取り扱いを索引で確認する。索引における「ケア／ケアリングcare/caring」の記述量は15行に及ぶ。このほかの項目で10行を超えるものとしては「人新世Anthropocene」（11行）、「資本主義capitalism」（10行）、「グローバルな／グローバル化global/globalisation」（12行）、「先住民族／先住民性indigeneity/indigenous/Indigenous」（15行）、「移動（人口移動）migration」（10行）、「新自由主義的な／新自由主義neoliberal/neoliberalism」（10行）、「人種／人種主義race/racism」（10行）「農村／農村性rural/rurality」（12行）、「スケールScales」（10行）があり、これらと比べてもケアとその周辺概念についての分量が多い。

索引の「ケア」に挙げられている語を、末尾の表2にまとめた。これをみると、「ケアの倫理」や「（ケアと）責任」という哲学的側面と、ケア労働者の国際移動といった労働・経済の地理学的側面とが、人文地理学においてケアを取り扱ううえで重視されていることがわかる。このことは、ケアを感情や個人的な行為に完結したものとしてではなく、グローバルな政治経済の仕組みとして捉えようとする視点が強いことを意味する。

3 「ケア」とその周辺概念を含む記述内容

(1) グローバルなケアエコノミー

この項目は、G.S. サビオと R.S. パレーニャスによって執筆されている。ここではいわゆる「グローバル・ケア・チェーン」がどのように生じてきたか、ケア・チェーンという見方への批判や関係するモデルが解説される。ケアの地理学の動向を整理するために重要であると考えられるのは、ケア労働（care work）と再生産労働（reproductive labor）との違いが明確化されていることである。そこでは、伝統的な定義におけるケア労働だけでなく、再生産労働を対象とすべきであることが示される。

具体的には、ケア労働と再生産労働との違いは以下のように説明される。「ケア労働とは対面での接触を伴い、受け手の人的能力を育成するサービスの提供を指す。対照的に、再生産労働は、“日常のかつ世代を超えて人々を維持するために関わる一連の活動や関係”を包含する（・・・）。そのため、再生産労働はケア労働よりも幅広い活動を含み、家庭用品の購入、食事の準備、洗濯、家具のほこり払い、床の掃除、地域社会との絆の維持、大人や子供の世話、子供の社会化、そして感情的なサポートの提供などが含まれる」（p.480）。また、移民女性によって行われる労働の多くは実際には非関係的であるため、伝統的な“ケア労働”の定義には当てはまらないとされる。

再生産労働の概念を用いるべき理由としては、ケアの提供者と受給者との間にある人種的格差を説明する上で有用だからである。例えば、家庭、病院、長期介護施設、学校などのケア機関において、誰が雑用や雑用以外の労働をし、養育的な仕事や養育的でない仕事を行っているか

といった業務の範囲に注目することができる。また、家事労働では本を読んであげたり感情的なサポートを提供したりするといった“精神的な *spiritual*”労働は主に雇用主によって行われ、洗濯、床の掃除などの雑用は、主に移民女性や有色人種の女性によって行われていることが多いが、再生産労働の概念によって、こうした分業または格差を十分に説明できるようになる。

続いて、「再生産労働の国際分業」という概念と、それを導入する意義が説明される。「再生産労働の国際分業」という概念は、E. N. グレンが1990年代に提唱した「再生産労働の人種的分業」に基づいて構築されている。グレンによれば、階級的特権を持つ女性は、低賃金の有色人種の女性を雇用することで、精神的、感情的、肉体的な労働から自らを解放している。有色人種の女性によって担われる低賃金労働は、飲食サービスの調理・提供、ホテルのハウスキーピング、介護助手など、多岐にわたる職種を包む。再生産労働の国際分業という概念は、こうしたグレンの理論を国際的な文脈に置き、それを拡張したものである。この概念は、移民による再生産労働が送り出し国の家族や共同体にもたらすコスト（代償）を考慮に入れ、そのコストを受け入れ国の雇用主世帯が得る利益と並置する。こうした再生産労働は「トランスナショナルな分業の一形態であり、移動の送り出し国と受け入れ国の双方において、グローバル資本主義とジェンダー不平等の双方によって形作られると同時に、それらを形作り返しているということを示している」（p.480）。

以上のように、この章では、ケア労働と再生産労働の定義を明確化し、再生産労働の商品化およびジェンダー・人種による階層化、それらの国際分業といった概念の確認を通じて、家庭や施設といった特定の場所で行われる日常的な営みが国際的な政治・経済システムに深く組み込まれていることを理解させる。この章の後半では、こうした構造の具体例としてフィリピン人女性の移動とそれを支える国家や教育といったインフラが解説される。

ただし、再生産労働は「感情的サポート」から「清掃・雑用」まで広範な行為を包含する概念であるため、この枠組みは必ずしも「女性」という性別のみに限定されるものではないだろう。いずれにせよ、この章で示される視点は、性別、人種、階級が複雑に絡み合いながら動態的に形成される再生産労働の諸相を明らかにし、複数の空間スケールの内外における相互依存性を浮き彫りにする。

（2）ケアと責任

この項目は、ミリアム・ウィリアムスとエマ・パワーによって執筆されている。導入として「一杯のコーヒー」の写真が用いられ、コーヒーを飲むという日常的な行為からグローバルなサプライ・チェーンへのつながり、そこにおける労働問題や環境問題、フェアトレードといったテーマを通じて、ケアと責任の地理学の意義が説明される。これによれば、コーヒーは「様々な人々が日常的な活動、すなわち消費する製品を通じて、互いをケアする責任をどのように負っているかを示す興味深い例」である。ここで留意しておきたいのは、「ケアと責任」が取り扱う

具体的なテーマは、必ずしもフェアトレードのみではないという点である。ケアとは「そのような関係性や他の多くの関係性の地理、すなわち近隣に住む人々や遠方に住む人々、そして私たちは生活が大きく異なる“他者”を含む人々と私たちがどのようにつながっているかを考察するのに役立つ概念」（p.832）とされる。

この章は大きく 4 つのパートに分かれており、ケアの定義と社会地理学における意義、ケアにおける責任の範囲および様々な政治的アプローチ（フェミニストのケアの倫理）、ケアに対する責任の時間・空間を超えた広がり、ラディカル・ケアなど変革の可能性に関する考察が示されている。このうち、本稿では、ケアの定義と、フェミニストのケアの倫理についての内容を主に紹介する。これを取り上げる理由は、ここでの「ケア」の定義が、一般的にイメージされる「ケア労働」（保育や介護・看護など）や前項で述べた「再生産労働」と重複するものの、より広範な意味内容を含むこと、また、フェミニストのケアの倫理の哲学は定義にも影響しているほか、現象の解釈といった研究上の実質的作業のうえでも必須となる概念であることである。

まず、ケアの定義について、ここでは「世界と他者への倫理的姿勢と志向（例えば、ある問題、他の人、場所を気遣うこと）と、実践（行われること、何かまたは誰かを世話すること）の両方を記述する概念」、「私たち自身を超えて他者を考慮するよう促す実践」、「私たちの生活と社会にとって不可欠であり、生き残り、豊かな生活を送るために必要とする普遍的なニーズ」（p.832）として示される。これらの「ケア」はジェンダー化され、公共や政治の議論で不可視化されてきたが、フェミニストや地理学者が明らかにしたように、それらが多様なアクターによって実行され、家庭を超えた複数の場所で行われる実践であるという本章の認識がまず明らかにされる。

そのうえで、フィッシャーとトロントによるケアの定義—「私たちの“世界”を維持し、継続し、修復するために私たちが行うあらゆる活動を含む種的活動」（p.832）—を通じて、ケアの持つ広範な意義と範囲は次のように定められる。すなわち、「ケアの実践には、誰かに一杯のお茶を入れる、料理をする、贈り物を渡す、掃除をする、子どもの世話をするといった日常的な活動が含まれる。また、私たちの世界を構成する家から学校、職場、そして人間以上の環境に至るまで、私たちが住む場所を維持し、修復する仕事も含まれる」（p.832-833）と。これには、前節で述べた再生産労働との類似がみられるが、ここで想定されているのはより広い認識や行為である。

続いて、トロントのケアの 4 段階（後に 5 段階）が説明される。ケアは、一連の段階を経て行われる。第一段階は「気遣う」（caring about）であり、ケアの必要性があることを認識する注意深さ（attentiveness）が伴う。第二の段階である「世話をする」（taking care of）は第一段階で特定されたケアの必要性に対して責任を負う段階で、個人的にニーズを満たす以外にも他の誰かに手配するといったことも含まれる。第三の段階は「ケアを提供する」（care giving）で、第一段階で特定されたケアの必要性を直接満たすという実践的な仕事を指し、それができないかは能力（competence）につながっている。第四の段階は「ケアを受け取る」（care receiving）であり、ケアを受けた対象または人物のニーズが満たされたかどうかに関心を向け

評価することを含み、応答性 (responsiveness) の姿勢が不可欠となる。トロントのケアの段階はその後、第5の段階として「共にケアする」(caring with) が加わっており、これは連帯や社会によるケア責任の分配の公正化にあたる。

こうしたフェミニストのケアの倫理やケアの段階論を経ることによって、ケアを公的で関係的なものとしてみなすことが可能になる。また、ケアの段階論は、ケアがいくつかの段階によって達成され、それはすべての段階を一人の個人が担うとは限らないことを理解させ、また不全が生じている段階を特定し代替案を検討することを可能にする。たとえば本章では、フェアトレードを例として、認識するだけで行動しない(できない)例が示されており、その記述の意図は必ずしも明確ではないものの、個人がフェアトレード商品を買うか買わないか、といった次元のみで考えることの弊害(個人の無力化や思考停止)から脱却するという利点が示唆されていると考えられる。

また、上述のようなケアの定義と段階論の理解は、「一部の人々だけがケアを必要とする、という現在支配的な考えや、ケアが家族内で行われる私的な実践に過ぎない、という考えに異議を唱え」、「ケアを、私たちが他の人々と持つあらゆる関係や、私たちが参加する活動の一部となり得る、中心的な社会政治的な実践として見る」ことを可能にする (p.833)。この考え方に立つと、ケアは、親密で個人的な関係(家族内や友人間)から専門的な場で行われる関係(医療や育児など)、距離を越えて行われる関係(インターネット技術や食料システムを通じてなど)まで、あらゆる種類の関係の一部として理解され、ケアの倫理がフードバンクや住宅提供者といった組織の文化の中で実践されることを捉えることができるという。

続くセクションでは、責任の範囲として西欧リベラルにおけるケアの私的責任と新自由主義による責任の不均衡や格差の拡大に対し、集合的かつ公的な責任としてケアを捉えるスカンジナビア諸国との対比が示される。これを踏まえたうえで、ケアを关系的、空間的に広範で公的な側面をもつ実践として捉える关系的ケア倫理と、時間と場所を超えたケアの責任の理論的根拠として、D. マッシーの「つながり」(connectedness)の議論やフェアトレードに関する先行研究、また、トロントのケアの第5段階「共にケアする」が参照されている。そのうえで、国家の役割として、公正な賃金、安全な労働条件、育児休暇を含むケア責任を持つ人の休暇の権利、基本的ニーズを満たすための資源への公平なアクセスを確保する福祉政策などが、ケアのための時間と財政的な能力の確保につながることを指摘する。最後に、「ケアのための変革」として、「ケアフル・ジャスティス」や「ラディカル・ケア」の理念と研究例が挙げられている。

(3) その他の項目のケアに関連する内容

ケア労働やアンペイド・ワークを取り上げる項目には、「仕事」「日常生活の身近な技術」「ポスト資本主義の地理」がある。

「仕事」の項目では、ある男女それぞれの24時間における「有償労働」「無償労働(アンペ

イド・ワーク)」「社交」「通勤」「睡眠」「食事」の割合が示され、J. K. ギブソン＝グラハムの「多様な経済論」および「経済の氷山」とフェミニストによる「経済」研究へのインパクトが言及される。さらに、太平洋地域における「フローティング・ココナッツ経済」(Floating coconut economy) のモデルがイラストで紹介されている (p.440)。このイラストでは、ココナッツの実が海に浮かんでおり、水面に出ている部分にはフォーマルな経済活動（「教師」「看護師」「軍の仕事」「タクシー運転手」等）が、水面下には「インフォーマルな経済活動」（ローカルなマーケットで売るための「ジャムを作る」「豚を育てる」「船を貸す」「盗品を売る」「セックス・ワーカー」等）と「貨幣を介さない経済活動」（例えば「高齢の女性を手伝う」「教会のカーテンを縫う」「家族に食事を作る」「木を植える」「食料のための釣り」等）が描かれている。また、「働く場所」についてもセクションが設けられており、リモートワークの拡充によって享受される「自由」は限定的であり、負担の増加やギグ・エコノミーの影響など、働く場所をめぐる問題は変化しながら、その影響は職種や階層によって異なっていること、働く場所のこうした変化によって、経済の氷山における「水面下の仕事」の必要性や価値への関心が強まっていることが示される。

「日常生活の身近な技術」では、家庭内でのケアや親密さと関連づけて、いかにテクノロジーと共に生きているかという視点の下、電気機器やデジタル化の影響が論じられている。たとえば、「20 世紀前半に電気機器が個人の家庭に入り込んで以来、掃除、暖房、料理、洗濯、その他の家事に関わる労働と時間、そして家庭内でのケアや親密さのあり方は一変した（・・・）。例えば、冷蔵庫は買い物に行く頻度を減らすことを可能にし、鮮度に対する理解を変化させたが、これは特に女性の家事労働の性質を変化させ」（p.939）、物質としての家電は家族の親密性を媒介する存在ともなっていることが指摘される。また今日では「家庭内のケアやケアの空間は、リアルタイムの視聴覚通信技術によって再編されており、新しい形態の“遠距離の親密さ（distant intimacy）”を可能にしている」（p.939）として、ビデオ通話やビデオ会議アプリの使用が情動の地理や家族のライフサイクルに影響を与える可能性を指摘している。

他方、技術革新とその積極的利用を理想とする「テクノユートピア」が喧伝されるものの、家庭用テクノロジーは、家事負担を減らすことにはしばしば失敗しているという。なぜなら、「それらは清潔さ、快適さ、安全、そして余暇に対する期待や慣習の基準を押し上げ」、結果として「家庭労働を増加させ、日常の実践を混乱させてしまう」（p.940）からである。また、家庭用テクノロジーを採用するには、デバイスやソフトウェアの使用法を学び慣れるという時間のかかるプロセスが必要であり、より急き立てられている感覚や、時間的な圧迫感、忙しさを感じさせることが指摘されている。こうした日常生活における機械・機器の影響に関する考察は、人間以外の存在（more-than-human）を取り込んだ研究潮流の一環として捉えられる。

IV 近年の動向と論点

本稿では、英語圏におけるケアの地理学の動向を概観した。『Introducing Human Geographies』（第4版）を参照して人文地理学におけるケアの取り扱いや関連領域をみると、「グローバルなケアエコノミー」と「ケアと責任」という大きく二つの軸があり、それらは互いに独立したものというよりは、相互に関連しあっている。また、仕事、日常生活における技術、ポスト資本主義といった項目でもインフォーマルなケア労働やアンペイド・ワークが扱われており、多様な経済論の影響も受けて、これらの記述内容は豊富であった。

日本への応用可能性については、以下のように考えられる。まず、「グローバルなケアエコノミー」はケア労働力を取り扱う地理学分野で一定の蓄積が進んでおり、特に高齢者介護については「グローバルなケアエコノミー」でみたような枠組みをアジア的文脈に修正しながら用いることが可能である。他方、育児や家事といった領域については、特に日本では移民労働力による提供が一般的でないことから、英語圏の枠組みをそのまま摂取することは難しく、育児や介護におけるアウトソーシングの規範や親族関係の西欧リベラルとの文化的差異を考慮に入れた枠組みが必要である。

次に、「ケアと責任」については、白人中心主義と植民地主義などを背景とした移民や途上国との関係性という歴史性および社会構造の違いがあり、東アジアに位置する日本の関係的責任はやや複雑である。また、環境正義、ケアの倫理やケアの5段階を用いた研究はほぼ未踏の分野だが、ケアの地理学として行われていないだけで、フードシステムや廃棄物の研究には多くの地理学的研究がある。ここにケアの倫理を持ち込むことの意義について、継続して検討してみる必要があるだろう。

他方、テクノロジーとケア労働との関係における人間以外の存在や、多様な経済論にもとづくインフォーマルなケア領域への着目には、日本の状況に照らして適用する余地があるように思われる。以下では、これに関連して、ケア・インフラストラクチャーの研究を紹介し、筆者が主に研究してきた子育てにおける自家用車という空間を取り上げて論点を提示してみたい。

1 ケア・インフラストラクチャー

近年、英語圏地理学において、都市のケア（福祉や社会的再生産）を分析するための「ケア・インフラストラクチャーcare infrastructure」（以下、ケア・インフラ）および「シャドー・ケア・インフラストラクチャーshadow care infrastructure」（以下、シャドー・ケア・インフラ）の研究が蓄積されつつある。

ケアの地理学の中でも都市のケアについての研究領域では、主に専門施設や専門的なケア労働力に焦点があたってきた。こうした従来の研究の貢献を踏まえつつ、2010年代以降、都市のケアをより多様な空間スケールや人間以外の存在を含み込んだ領域として捉え直す作業が進められている（Power and Williams 2020）。ケア・インフラの考え方は、そのような動きの中で、

フェミニストのケアの倫理、多様な経済論、影の地理学、新しいインフラストラクチャー論などを融合させた概念として登場した。

ケア・インフラは、自己や他者へのケアを容易にし、生存と生活を可能にする公式・非公式の基盤を指す。ここでの「インフラ」は単なる物理的な施設としてではなく、社会的なネットワーク、法的な枠組み、感情労働、人間以外の存在、デジタル・プラットフォームを含む多層的なものとして捉えられる。インフラは関係的なものであり、実践との関係において真のインフラとして機能する。そのため、ケア・インフラは、施設、設備、技術などの物質的な要素と、言説、感情、知識といった非物質的な要素が混ざり合って相互に作用するネットワークであり、ケアの実践が流れるために機能する「軌道 (tracks)」にたとえられる。この中で人間の主体や行為は、インフラを形成する社会技術的な網の目の一部として把握される。ここには、「インフラとしての人々 people as infrastructure」(Simone 2004, 2021) など、新しいインフラストラクチャー論も影響している。

ケア・インフラの具体的な事象としては、住宅、病院、図書館、コミュニティセンター、コミュニティにおける食料供給のほか、広場や舗道、街角本棚のような非専門的な設備や施設も含まれる。このように拡張されたケア・インフラの概念は、ケアを都市の基盤という連続的な広がりとして捉え直す可能性を持つ (Alama and Houston 2020, Lehtonen and Jupp 2025, Power and Mee 2020, Williams and Tait 2023, Power et al. 2022 など)。

シャドー・ケア・インフラは、ケア・インフラの中でも、支配的な国家的福祉体制から零れ落ちた「影」の領域におけるケアの基盤であり、政策や主流派の研究で不可視化されているが人々のケア実践を維持・組織化する役割を果たすものを指す。Power et al. (2022) は、都市の貧困ケアを事例として、これまでの福祉や貧困研究が多様なケア資源、実践、主体の経験といった実態を明らかにした一方で、それらが相互に結びついて機能していくプロセスが十分に明らかにされてこなかったことを指摘した。そして、それを理解するために、影の地理学や多様な経済論における「経済の氷山」の視点を援用しながら、新自由主義的な都市において公的支援が届かない隙間を埋める基盤をシャドー・ケア・インフラとして捉えることを提案した。「シャドー (影)」という概念は、それらの基盤が不可視化されているのみならず、既存の支配的な福祉の枠組み (国家、市場、公的な非営利セクター) の隙間や境界で生じていることも示唆している。シャドー・ケア・インフラを考えることは、福祉国家の撤退または公的福祉の不足・不在がもたらす「影」の中で人々がどのようにケアのネットワークを編み上げているかを注視することを意味する (Wiesel et al. 2025)。

移民や難民の子どもたちの生存や生活へのケアを検討する際に、公的な福祉制度の外部で機能するシャドー・ケア・インフラの概念が用いられている例もある (Olivier et al. 2025, Sheringham 2025)。移民や難民の子どもにとって、国家的福祉体制にもとづくケアサービスは限定的であるか、提供されていても当事者がアクセスできるケア資源は情報や入手ルートを含

め、しばしば断片化されている。コミュニティのボランティアグループ、民間団体（NGO や NPO）、移民家族自身が構築する非公式なネットワークは、公的な供給が限定的か縮小している領域において、生存や生活のために重要なパッチワークを構成している。こうしたパッチワーク状の基盤は、既存の多様な資源が特定の目的のもとに「継ぎ合わされる (assemble)」ことで、暫定的ながらも機能的なインフラへと変容していく過程として捉えられる。

上記のようなケア・インフラやシャドー・ケア・インフラは、その性質上、地域に埋め込まれた資源に依存し、また流動的であるがゆえに地域の動態とも連動する形で、マクロな構造的背景とローカルな文脈に規定されて展開する。たとえば、「インフラとしての人 *people as infrastructure*」はヨハネスブルグなどのアパルトヘイト都市で物理的インフラが供給されていない地区で生じる人々のつながりを前提として提唱されたものだが、日本では釜ヶ崎の研究で不完全なインフラを補う社会関係や「狡知」に類似したものとして用いられている（難波 2017, Haraguchi 2017）。また、久木元（2026b）では、多様な国や地域をルーツに持つ外国人が増加した大分県別府市において、外国人の親子への支援がどのように構築されたかについて、ケアの倫理およびケア・インフラストラクチャーの概念を用いた分析を試みた。さらに、子育てを支えるケアの地域差について、ケア・インフラの視点から概観した久木元（2026a）では、日本的な文脈を踏まえ、親族サポートは「インフラとしての人」として捉えられるほか、大都市郊外や地方圏におけるケア空間としての自家用車もまた、子育てを支えるケア・インフラの構成要素となっている可能性を述べた。

2 日常的な移動とケア空間

以上のように、ケア・インフラは相当に幅広い要素を対象とし、その方法論も現在進行形で試行錯誤が進められている概念である。ここでは、こうしたケア・インフラの視点から想起される論点のうち、子育てのケア空間としての「自家用車」について論じておきたい⁸⁾。これは、前章で参照した「日常生活の身近な技術」が家庭労働に及ぼす影響や人間以外の存在といった視点と、ケアのモビリティに関わる論点である。

(1) 子育てと自家用車—英語圏の研究事例

子育てにおける日常的な移動や自家用車というツールまたは空間に着目した地理学的研究は英語圏において蓄積されている。たとえば Dowling（2000）は、オーストラリアのシドニーに住む郊外の母親への質的調査から、複雑な日常のルーティーンをこなす「良き母親」という概念を実践するための補助手段として、自動車が使用されていることを示唆した。また、Gilow（2020）は、女性の労働市場への進出が進んだにもかかわらず、子どもの送迎や食料品の買い出し、介護が必要な家族の訪問などケア責任に関する日常のモビリティにおけるジェンダー差が残存しており、「家事移動労働（Domestic Mobility Work）」に関する研究の必要性を主張し

た。具体的には、ベルギーのブリュッセルで働く 45 名の母親へのインタビュー調査から、所得階層や職業階層によって家事移動労働におけるツールとしての自動車へのアクセスや依存度、アウトソーシングの可否といった点での差異が生じており、家事労働移動を含むロジスティクスには労力とスキルを必要とすることを示した。

Waitt and Harada (2016) は、オーストラリア・ニューサウスウェールズ地方都市における子どもを持つ夫婦を対象として、人間以外の存在に着目するフェミニストの視点 (More-than-human feminist perspectives) にもとづいた民族誌的調査から、自動車という移動空間において「家族のケア」がいかに行われているかを検討した。それによれば、自動車移動が多忙なスケジュールの中で家族として共に過ごすための機会を提供すると同時に、家族としての一体感が自動車という物質と身体・感情・情動・動作と絡み合って形成されていた。これらの研究では、自動車をもたらす環境汚染や「良き母親」「良き家庭」という規範を本質化することへの十分な注意を払いながらも、日常生活のケアや家事労働移動におけるツールや空間としての自動車の側面を明らかにしている。

これらを踏まえると、「ケアと移動」という領域には、前章でみたようなケア労働力のトランスナショナルな移動といった側面と、ケア労働に関する日常的な移動という側面とが含まれることがわかる。もとより、日常的な家事移動労働の問題については、時間地理学が有効な視角と方法を提供してきた。日本でも 1990 年代に行われた大都市圏郊外の調査から、日常生活における家事育児と就業に関する時空間的制約が明らかにされたが（荒井・岡本・神谷ほか 1996）、それから 30 年が経過し、就業環境や男女のジェンダー規範、保育環境や子育て支援制度のほか、居住地構造も大きく変化した。そうした現在において、日常生活の移動や家事移動労働の実態把握が必要となっている。

(2) 車というシェルター

最後に、ケアと日常的な移動に関連して、日本における子育てと日常的な移動の地域差を、筆者のこれまでの研究事例をもとに跡付けてみる。久木元 (2016) では、大都市の保育所待機児童問題において、鉄道などの公共交通機関に依存したライフスタイルと時空間的制約が影響していることを述べた。大都市の持つ匿名性の高さや個人の自由の感覚は、群衆の密度と公共空間の儀礼的無関心によって支えられている一方で、都市の群衆に溶け込んでこの自由を享受するためには、「場違いでない」身体とふるまいが必要となる。カーン (2022) はその著書の中で自身が妊婦や母となることで経験した子連れでの移動における心理的負担を、「ひとたび彼女が目覚めてお腹を空かせたりおむつを汚したりしたときには生々しい親の務めが人目に触れないようにと公衆トイレに駆け込むのだ。たとえば人前で授乳することがどれだけ胆力のいることか (・・・) 笑顔や手助けが差し伸べられるのは自分のからだにどうかという事を聞かせてまともに振る舞えているときとか赤ん坊を世話するやり方が大勢の他人を同時に満足させているとき

だった」(カーン 2022: 42-45)と表現する。こうした大都市における子連れでの移動の心理的負担の大きさは、筆者が行った東京都心の子連れ通勤者への調査における「電車の中で『(ベビーカーが)邪魔!』って言われたこともあります。肉体的にきついっていうのはもちろんそうですけど、そういう周りの冷たさが辛い」(久木元 2016: 77)との語りを想起させる。

また、こうした群衆の不寛容さは、密度の高さに加えて、交通デザインや都市計画にも起因している。カーン(2022)が指摘するように、大都市の駅や公共空間におけるベビーカーでの移動の困難は、移動障壁として親子の前に立ちはだかる。加えて、多くの都市交通システムは郊外から都心の通勤ラッシュをさばけるように設計されており、仕事とケア労働を両立するためには、複数の乗り換えなど追加的なコストを負担せざるをえない。

一方、女性は交通弱者としてみなされることが多いが、その状況は時代や地域によって様ではない。いわゆる「クルマ社会」となっている日本の地方圏では、通勤を含む日常的な移動に女性も自家用車を用いることが一般的となっている。岡本(1998)は中京都市圏のパーソントリップ調査を用いて、女性の自家用車利用の特徴を1971年と1991年の比較から明らかにした。これによれば、近隣でも遠くへの移動にも自動車が利用される傾向が強まっており、就業女性・既婚女性の主要な活動範囲は自家用車を利用した移動により広域化した。特に女性就業者では30歳代前半で自動車利用率がピークとなり、この理由として自宅、職場、保育施設の間を迅速に移動するために自動車利用の重要性が高まることが指摘されている。

女性における自家用車の普及は、軽自動車の普及とも関係している。伊藤(2018)は、1995年度と2015年度の軽自動車の保有率と既婚女性の就業に関する市区町村別データからローカルモラン統計量による検定を行った。その結果、三大都市圏や北海道、政令指定都市等に低率のクラスターや局所的に低い地域が形成されているのに対し、東北地方南部や中国山地、讃岐山地付近、九州地方は高いクラスターがあることを報告した。また、既婚女性の就業率との関係性は1995年から2015年にかけて特に「主に仕事」で年齢の高い者における大幅な上昇がみられることから、軽自動車の普及がフルタイム労働者のような既婚女性の(再)就業の促進に関係しているとした。

子育てする親にとって、車は移動手段であると同時に、拡張された私的な空間でもある。送迎中に車内で食事や着替えをさせることができる。何より、公共交通機関で「子どもが騒ぐこと」への制御や周囲への気遣いといった心理的負担を感じずに済む。こうした「遠慮」の感覚は、日本社会において特に顕著であると言えるかもしれない。

「クルマ社会を問い直す会」が開催した講演会で、登壇者と対談した岡田百合香氏は、車や車社会の問題性を踏まえつつ、以下のように指摘している。「自動車も、女性の身体的、物理的な弱さを埋めあわせる道具として機能します。車に乗ってしまえば、(・・・)腕力がないという理由で暴力を振るわれたりするリスクからは解放される」⁹「母親が子どもを連れていて、その子どもが周囲を不快にさせる行動をとると、しつげがなっていない、と攻撃的な視線や言葉に向け

られることがよくあります。（・・・）（車では）子どもを自分の目の届くところにずっと置いておけて、他者が侵入してくることもありません」¹⁰⁾。このように、子育てをする母親の立場からすると、車は身体能力を機械によって拡張し、公的空間から子どもや自身の安全やケアを確保できるシェルターの役割を果たしてきたといえる。

もちろん、ケア空間としての自家用車が持つ力は両義的である。運転免許や車の所有が条件であり、運転者に主導権が集中するため車内空間は支配や暴力の空間にも転じうる。また、根本的には、公共空間で危険や心理的負担を感じない寛容な社会の醸成やケアに配慮した交通デザインが必要であることは疑いようもない。それでも、それが実現していない現状において、自家用車は子連れでの移動における身体的・心理的負担が小さく、安心して移動ができるケア空間として、子育てする女性たちの合理的な選択となっている。とりわけ、日本では軽自動車という独自の規格の存在によって、普通車に比べ安価に所持することができ小回りのきく軽自動車は女性にも利用障壁が低い。特に駐車場の問題をクリアしやすい地方圏や郊外においては、女性の身体能力を拡張し、私的なケア空間としても機能する自家用車が、ケア労働を可能とする道具として組み込まれてきたといえる。

先行研究が指摘するように、自家用車の使われ方は居住地域、性別・年齢、所得・職業、関係性によって多様であり、文化的背景にも依存する。地域のケア労働の実態やケアを支えるインフラとしての理解を深めていくためには、今後さらなる実証研究が必要である。

（京都大学大学院人間・環境学研究科）

【付記】

本研究の遂行にあたり、JSPS 科研費 24K00177, 24K00179, 23K22032 の助成を受けた。また、英語文献の日本語への訳出に際し、生成 AI (DeepL, Gemini) の支援を受けた。

【注】

- 1) 「持続可能な社会保障制度の確立を図るための改革の推進に関する法律」（2013 年成立）第 4 条第 4 項の規定による。
- 2) ただし、国としての政策化がされる以前から、地域の医療や福祉行政等の連携を主眼とするこうした理念や取組は存在し、たとえば広島県御調町（現・尾道市）では 1980 年代より地域の福祉行政と医療との連携が取り組まれていた。これらの先進事例は 2000 年代の介護保険導入以降に厚生労働省の研究会によって参照され報告書や研究会発足が行われている。
- 3) 英語圏地理学における白人中心主義批判と関係する「責任」や「ケア」の主張は一方で批判も受けた。たとえば Barker and Pickerill (2024) の整理によれば、D. マッシーの「責任の地理学」について、特に植民地主義との関連や国際的な搾取体制下での労働人口の大規模な移動などを通じて形成される場所の「共構成」という点で、「責任」という言葉が物質的な影響もパフォーマンス的な挑戦も欠いた単なる「倫理的ジェスチャー (ethical gesture)」になりかねないという点、責任という概念がグローバル・ノースの学者によって独善的に取り込まれてしまう可能性がある点が指摘された。ケアの地理学がトロントの

ケアの倫理を積極的に摂取するのは、責任を抽象的な理念にとどめず、ケアの5段階における「能力」「応答性」「連帯」といった概念を用いることによってリソースの分配やケア受給者の主体性を重視する実践的な地平へ引き戻すためでもあろう。

- 4) 「Caring Geography」という現在分詞を用いた表現には、「ケアについての地理学」という客体的な認識から、「ケアという実践をとまなう地理学」という主体・方法論を重視する立場が表れている。
- 5) ケリー・ドムブロスキーはアジア太平洋地域におけるコミュニティ開発の研究を手掛け、フェミニスト地理学、コミュニティ経済、多様な経済論、都市コモンズの分野で研究業績を持つ。2024年に単著『Caring for life: A Postdevelopment Politics of Infant Hygiene』を出版。ニュージーランドのマッシー大学教授。
- 6) チュンシー・チェンは都市研究、社会文化研究を行う地理学者で、文化的地域、都市研究および都市理論、都市農村システム、文化的経済地域、社会的・文化的視点からのサステナビリティといった関心を持つ。2018年に単著『Re-visioning the Public in Post-reform Urban China: Poetics and Politics in Guangzhou』を出版。香港大学准教授。
- 7) アンドリュー・ウィリアムズは福祉、ケア、宗教、新自由主義の関係について人文地理学を含む学際研究を手掛け、フードバンクやホームレス支援等を扱う。カーディフ大学上級講師 (Senior Lecturer)。
- 8) この節の内容は、久木元 (2025, 2026a) をもとに加筆修正したものである。
- 9) クルマ社会を問い直す会 2024. 「自転車×ジェンダー」<https://kuruma-toinaosu.org/?p=4807> (2025年12月1日最終閲覧)。
- 10) クルマ社会を問い直す会 2024. 「自転車×ジェンダー」<https://kuruma-toinaosu.org/?p=4807> (2025年12月1日最終閲覧)。

【文献】

- 畔蒜和希 2019. 英語圏の研究にみる「ケアの地理学」の射程. 2019 年度日本地理学会発表要旨集. https://doi.org/10.14866/ajg.2019a.0_78.
- 畔蒜和希 2021. 地理学におけるケアサービス研究の論点. 駿台史学 173, 135–156.
- 荒井良雄・岡本耕平・神谷浩夫・川口太郎 1996. 『都市の空間と時間 生活活動の時間地理学』古今書院.
- 伊藤修一 2018. 日本における軽乗用車保有率と既婚女性就業率との関係の空間分析. 2018 年度日本地理学会春季学術大会発表要旨集. https://doi.org/10.14866/ajg.2018s.0_000237.
- 稲田七海 2009. 介護保険制度の受容に伴う高齢者ケアと相互扶助の変容—上甕島旧里村を事例として—. 人文地理 61 (4), 328–347.
- 岡本耕平 1998. 1970 年代以降の自動車利用率の増加要因とそのジェンダー的側面—中京都市圏パーソントリップ調査データを利用した分析—. 名古屋大学文学部研究論集 131, 155–166.
- カーン, L. 著, 東辻賢治郎訳 2022. 『フェミニスト・シティ』晶文社.
- キティ, E. F. 著, 岡野八代・牟田和恵監訳 2010. 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社.
- 久木元美琴 2016. 『保育・子育て支援の地理学』明石書店.
- 久木元美琴 2022. コロナ禍における保育の場所と家庭内のケアワーク. 2022 年度日本地理学会発表要旨集 https://doi.org/10.14866/ajg.2022a.0_21
- 久木元美琴 2024. 都市地理学は「ケア・フル・シティ」の夢を見るか?. 地理 69(6), 6–7.
- 久木元美琴 2025. 車というシェルター. 地理 70(4), 8–9.
- 久木元美琴 2026a. 「子育てを支えるケア」の地域差について—子育て支援の地理学の視点から. 『現代思想』54(5), 173–184.

- 久木元美琴 2026b. 別府における外国人の親子への支援—ケア・インフラストラクチャー概念を手掛かりに—.『経済地理学年報』72(1) (印刷中).
- 杉浦真一郎 2019. 福岡県福津市における地域包括ケアシステムにみるローカル・ガバナンスの変化. 2019 年度日本地理学会発表要旨集. https://doi.org/10.14866/ajg.2019s.0_142.
- 中村 努 2016. 高知県梼原町における地域包括ケアの地理的多様性. 2016 年度日本地理学会発表要旨集. https://doi.org/10.14866/ajg.2016a.0_100001.
- 難波美波 2017. コメント②Infrastructure as Conceptual Analytical and Empirical Ethnographic Tool. マテリアリティの政治と「インフラ論的転回」—社会の近代性を支えるヒト・モノへの問い— (愛知大学 人文社会学研究所 2016 年度ワークショップ報告書), 53–63.
- 畠山輝雄 2016. 徳島県鳴門市における地域包括ケアシステムの構築とローカル・ガバナンス. 地域地理研究 22 (2), 28–30.
- 宮澤 仁 2017. 強韌化 (きょうじんか): 強くしなやかな社会 医療・福祉の強韌化と地域包括ケアシステム. 測量: 地理空間情報の科学と技術 67 (10), 12–17.
- 宮澤 仁 2021. 『都市高齢者の介護・住まい・生活支援—福祉地理学から問い直す地域包括ケアシステム』 明石書店.
- 三浦尚子 2016. 精神障害者の地域ケアにおける通過型グループホームの役割—「ケア空間」の形成に注目して—. 人文地理 68 (1), 1–21.
- Alama, A. and Houston, D. 2020. Rethinking care as alternate infrastructure. *Cities* 100, Article 102662.
- Dombroski, K., Goodwin, M., Qian, J., Williams, A. and Cloke, P. eds. 2024. *Introducing Human Geographies* (4th edition). Routledge.
- Dowling, R. 2000. Cultures of mothering and car use in suburban Sydney: a preliminary investigation. *GEOFORUM* 31, 345–353.
- Gilow, M. 2020. “It’s work, physically and logistically”: Analyzing the daily mobility of employed mothers as Domestic Mobility Work. *Journal of Transport Geography* 85, 102693.
- Haraguchi, Takeshi, 2017. A Historical Geography of Kamagasaki and the ‘People’s Infrastructure’. *Disaster, Infrastructure and Society: Learning from the 2011 Earthquake in Japan* 6, 30–37.
- Hochschild, A. R. 2000. Global care chains and emotional surplus value. W. Hutton and A. Giddens eds. *On the edge: Living with global capitalism*. Jonathan Cape, 130–146.
- Lawson, V. 2007. Geographies of care and responsibility. *Annals of Association of American Geographers* 97, 1–11.
- Lawson, V. 2009. Instead of radical geography, how about caring geography?. *Antipode* 41, 210–213.
- Lehtonen, P. and Jupp, E. 2025. Care infrastructures in disadvantaged neighbourhoods at times of welfare state change: Finland and UK compared. *Urban Planning* 10, Article 10093.
- Massey, D. 2004. Geographies of Responsibility. *Geografiska Annaler. Series B, Human Geography* 86(1), 5–18.
- McEwan, C. and Goodman, M. K. 2010. Place geography and the ethics of care: Introductory remarks on the geographies of ethics, responsibility and care. *Ethics, Place & Environment* 13, 103–112.
- Olivier, J-L., Santleben, S. D., Baremgayabo, F. F., Amponsah, M., Mee, K. and Hodge, P. 2025. Taking shadow infrastructures of care seriously: towards more caring futures with women from migrant and refugee backgrounds in Newcastle, Australia. *Australian Geographer* 56(1), 105–125.
- Power, E. and Mee, K. 2020. Housing: An infrastructure of care. *Housing Studies* 35(3), 484–505.

- Power, E. R., Wiesel, I., Mitchell, E. and Mee, K. J. 2022. Shadow care infrastructures: Sustaining life in post-welfare cities. *Progress in Human Geography* 46(5), 1165–1184.
- Power, E. R. and Williams, M. J. 2020. Cities of care: A platform for urban geographical care research. *Geography Compass* 14(1), e12474.
- Sheringham, O. 2025. Creating cities of care: Towards a new radical care framework for geographical research with urban migrants and refugees. *Progress in Human Geography* 49(3), 266–285.
- Simone, A. 2004. People as infrastructure: intersecting fragments in Johannesburg. *Public Culture* 16(3), 407–429.
- Simone, A. 2021. Ritornello: people as infrastructure. *Urban Geography* 42(9), 1341–1348.
- Waitt, G. and Harada, T. 2016. Parenting, care and the family car. *Social & Cultural Geography* 17(8), 1079–1100.
- Wiesel, I., Mee, K., Power, E. R. and Mitchell, E. 2025. Housing and the Post-Welfare Patchwork of Shadow Care Infrastructures: Housing as Patch and Thread. *Theory and Society* 42(5), 554–570.
- Williams, M. J. and Tait, L. 2023. Diverse infrastructures of care: community food provisioning in Sydney. *Social & Cultural Geography* 24(8), 1362–1382.

表1 『Introducing Human Geographies』（第4版）の構成

PART 1 導入					
1. 人文地理学とは		2. 人文地理学を实践する			
PART 2 基礎					
3. スケール	4. 時間	5. 場所	6. 景観	7. 人間以上(以外)の存在More-than-human	
8. 非(超)表象的なものMore-than-representation		9. マジョリティ・ワールドとマイノリティ・ワールド			
10. 先住民		11. 移動(モビリティ)		12. ジェンダー・セクシュアリティ	
13. エスニシティ・人種					
PART 3 テーマ別					
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	
[地域地理]		[文化地理]		[政治地理]	

注) タイトルに「ケア care」を含む項目をゴシック体とし下線を付し,「ケア労働 care work」「家庭内のケア domestic care」「アンペイド・ワーク unpaid work」を内容に含む項目をゴシック体とした。セクション名を[]で示した。PART 1, 2, 5 にはセクションが設定されていない。

資料 : Dombroski, K. et al. (2024) より作成。

表2 索引における「ケア／ケアリング」の項目

原文	日本語訳
care / caring	ケア／ケアリング
chain	(ケアの) 連鎖, ケア・チェーン
circulation model	循環モデル, 還流モデル
description	定義
diamond model	ケア・ダイヤモンド・モデル
economies of	ケアの経済
ethical consumption	倫理的消費
as ethics	倫理としてのケア
exclusionary structures	排除的構造
export-oriented education	輸出志向型教育
feminist care ethics	フェミニストのケアの倫理
frameworks	枠組み
-full justice	ケアに満ちた正義, ケアを重視する正義
globalisation and care	グローバル化とケア労働
migration	ケア移民／ケアをめぐる移動
migration infrastructure	移動インフラ (制度や業者)
multinational migrations	多国籍間の移動
neoliberal philosophies	新自由主義的哲学
phases / stages	フェーズ／段階
practice, time and space	実践、時間および空間
practice and ethics	実践と倫理
and responsibility	(ケアと) 責任
socio-spatial intersections	社会・空間的な交差
state management of...	国家によるケア移民管理
transforming for	～のための変容／変革

資料 : Dombroski, K. et al. (2024) より作成。